



TIEPh

Transdisciplinary Initiative for Eco-Philosophy

Transdisciplinary Initiative for Eco-Philosophy



TOYO UNIV.

Newsletter No.23 2016. 3

ファイナルエコ・フィロソフィ

環境デザインユニット：河本 英夫

ここ5年間続いたエコ・フィロソフィ研究の最後を締めくくる、最終シンポジウムとして「かおりの生態学」を開催した。香りに注目し、生態系を考え直す試みである。最初に坂井多穂子さんによる漢詩のなかで歌われた臭いについて、講演が行われた。中国の文人たちがどのような臭いに敏感に反応して漢詩に思いを込めたのかについて、いくつかの分析が示された。



その後、京大生態学研究センターの高林純示先生を招いて、「香り」という環境要素についての基調講演を行っていただいた。臭いや香りは、人間の生態系の主要構成素にはなっていないのだから、見落としがちである。人間の生態系の主要要素は、もっぱら視覚と言語由来の聴覚に由来している。これに対してたとえば犬であれば、人間の1000万倍の嗅覚能力があるとされており、警察犬としても活用されている。臭いは情報の一種だが、この臭いがどのように活用されているかについて、高林先生の講演が行われた。純粋に自然科学系の発表であったが、興味深いものであった。臭いが生態系のネットワーク形成に構成素として寄与しているというものである。たとえばキャベツは、葉っぱを食べられると独特の臭いを発する。この臭い

が葉っぱを食べている昆虫の天敵を呼び寄せることになり、それを活用して害虫から身を守る仕組みを作り上げている。この臭いは、複数の害虫がやって来た時には、複数のモードの臭いを出すために、複雑な効果が出る。臭いのモードには害虫の唾液の要素も寄与しているとのことである。極めて詳細な分析にも進むような展開可能性のある講演であった。

最後に河本英夫が、ここ5年間のプログラム展開の総括を行った。それはこのエコ・フィロソフィが展開可能性だけに依存した同心円型のプログラムになるという全体のイメージをあたえるものとなった。

(2015年12月5日開催)

復興の自己組織化（国際シンポジウム「after our Fukushima」）

環境デザインユニット：河本 英夫

復興期のフクシマには、多くの課題がある。そこにも日本固有の文化的資質が含まれている。シュテンガー教授(ウーン大学、哲学教育学部)と山口一郎客員教授と河本英夫教授の三者と、シュテンガー教授の弟子であるガーベルベルガー氏を交えて語り合うことになった。復興のプロセスは、ある種の自己組織化であり、動きを作り出しては、それによって周辺の素材を動かし、新たに質料

を用意し、可能な素材を資源として活用していく仕組みである。これは当初用意された部分を組み合わせるような仕組みとは異なる。このプロセスの特質は、質料をプロセスをつうじて資源化していくこと、動きが次の動きを作り出していくように組み立てること、それによって遅々として進まないように見えるプロセスが時として、大幅に変貌し、別の回路が立ち上がっていくこと等が含まれている。

シュテンガー教授は、こうした仕組みは日本の「Butoh」(暗黒系舞踏)に似通ったものだと語っていた。ブトウは、身体の内奥に含まれる身体そのものの内発性をさらに引き出していくための仕組みでもある。すでに力が入ってしまっている定型身体から力を抜き、全身の可能性をリセットする仕組みであることは確かである。

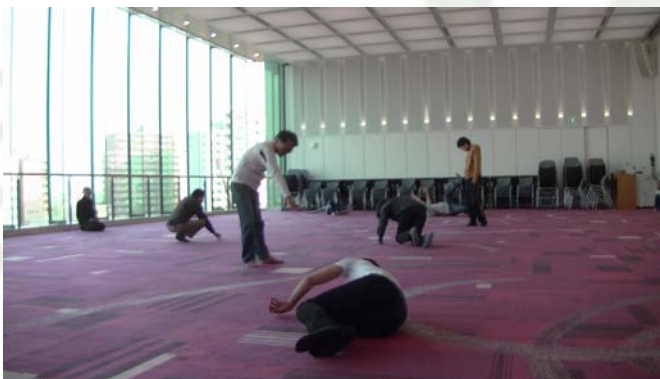
ところがこうした技法は、身体表現だけではなく、各種スポーツ競技でも見られる。そのさい最も大きな指標となるのが、テクニックとスキルの区別である。テクニックはうまさにかかわっており、特定の練習を積み重ねれば向上していく。しかしスキルは、自分のもっている能力をその時々状況下でどのようにして最大限発揮するかにかかわっている。スキルは対応可能性の広さと言っても良いし、能力の発揮の仕方だと言っても良い。バイエルン・ミュンヘンのサッカーのスーパースターのミュラーにそうした典型例を見ることができる。



(2015年10月13日開催)

身体のリセット (即興ダンスワークショップ「環境—人間の組織化」)

環境デザインユニット：河本 英夫



ダンサーの岩下徹さんをお願いしてワークショップを行った。岩下さんは、即興ダンスセラピーを手掛けており、ダンスでの障害者(あるいは健全者)とのコラボをつうじた人間の能力の再組織化を行うものである。ただしワークショップは初級者向けのものであるため、身体を力なくるところから開始する。

身体は重力に抗して立つ。この単純な事実のなかに身体の圧倒的な謎が含まれている。どこまで力を抜いてもなお立っていることができるのか。

寝そべった状態から立つということは、エネルギー最短の回路はあるのか。無駄なエネルギーを一切使わず、立ち上がることはどのようにすることなのか。立つことができるためには、床から反作用を受けなければならない。床からの反作用はどのようにすれば感じ取ることができるのか。通常は隠されたままになっているこうした身体の感度を回復することがワークショップの課題である。

身体は多変数関数に似ている。ある変数に無理がかかれば、他の変数を調整している。その場合、全身から力を抜くためには、どの変数に働きかけるかは、圧倒的に個人差がある。どこから関与しなければならないということではない。また動きのさなかでの身体の再組織化は、プロセスのなかでの感じ取りを必要とする。それは通常活用していない変数を改めて「変数化」することに近い。そうした多くの事柄を体得していくためのワークショップである。

(2015年12月16日開催)

第7回人間再生研究会

環境デザインユニット：稲垣 諭



TIEPhの第3ユニットは、12月19日に毎年恒例となった第7回人間再生研究会を開催した。今年度のテーマは「抑制システム」である。理化学研究所で活躍している村山正宜先生には「皮膚感覚の知覚と記憶の脳内メカニズム」という表題で講演いただいた。マウスの実験で分かったのは、触覚的なテクスチャの認知の精度が、ボトムアップ的な感覚入力によって決定されるのではなく、人間でいう運動前野ないし補足運動野からのトップダウン的なサーキット回路を通じて高められているというものであった。リハビリテーションの臨床の現実でいえば、麻痺等の回復には、刺激を与えるだけ

けでは感覚の形成が行われず、認知的な自発性や意志の役割の重要性が指摘できる。

第3ユニットの河本先生の講演「システムの抑制」では、リハビリテーションの臨床における意識、身体、動作の抑制のモードを取り出す試みが行われた。実際に身体に緊張が出ている場合、それが抑制の働きによるものか、抑制が解除されたことによるのかを決定するのは難しい。その意味では「抑制」という働きはそれ自体として理解することよりも、他の関係の中でそのつど見出していく必要があることが確認された。その他、月成亮輔先生と菊地豊先生による症例発表もあり、研究会は盛況のうちに終了した。

(2015年12月19日開催)

日本道教学会共催特別講演「洞天福地と環境」

センター長：山田 利明

発表者の土屋昌明氏（専修大学教授）は、数年前より科学研究費補助金を得て、道教思想の中にある洞天福地思想の解明に従事している。その研究は文献研究にとどまらず、中国各地に所在する洞天あるいは福地を訪ねての現地調査を実施し、ユニークな研究を展開している。中国研究の分野では、きわめてユニークな研究として注目されていて、その総合的な成果の公表が待たれるところである。

洞天福地とは、簡単に説明しておく、道教でいう神仙（不老不死の人）の住む地、あるいは神仙になるための修行に適した土地をいう。洞天は洞窟の中に存在する別世界であり、そこでは時間もこの世とは全く別の時の流れに従う。住む人はいずれも不老不死、したがって一日がこの世の数年・数十年に当たる。福地も神仙の居所、あるいは神仙になるための修行の適地とされるが、こちらは地上に現れた一種の異界といえよう。

洞天も福地も神仙修行の者にとっては、神との交歓を果たす聖地であり、その景観は優れ、奇峰・奇岩があって清流



が流れるというところが多い。また錬金術に必要な鉱物や薬草にも恵まれた土地というのがその大概の姿である。洞天には「十大洞天」あるいは「三十六洞天」があり信仰の対象となるが、その全てが洞窟をもつわけではない。洞窟のない山も洞天として数えられる。それは修行をして高い徳を身につけた者でなければ見えない入口をもつのが洞天であるからで、現実の地理的世界とは異なる様相をもつ。

本邦においても、例えば吉野・熊野の大台ヶ原のように、信仰と結びついた自然環境は太古からの姿が保存されている場合が多い。同様に、中国においてもこうした名山信仰がその地の環境保全を促している側面がある。それと同時に、やはり異界のもつ自然環境に触れることで、自然の神秘を知る一助にもなる。

環境問題に関しては、負のイメージが大きい中国の現状に対して、太古からの自然遺産をどう受け継ぐのかを考える機会と成れば幸いである。

(2015年11月14日開催)

2015年度の活動報告

- 4月
ニューズレターNo.21 発行
- 5月
TIEPh主催 ワークショップ(環境デザインユニット)
「身体と環境」
場所：東洋大学6号館文学部会議室
- TIEPh主催 シンポジウム(自然観探求ユニット)
「宋代の自然観」
場所：東洋大学2号館スカイホール
- 7月
TIEPh主催 定例研究会
(自然観探求ユニット、環境デザインユニット)
場所：東洋大学2号館第1会議室
- 8月
モンゴル国ウランバートル市周辺の都市環境および遊牧文化の自然観の調査
(自然観探求ユニット、環境デザインユニット)
- 9月
書籍『エコ・ファンタジー——環境への感度を拡張するために』(春風社)刊行
2015年度東洋大学「全学総合科目」として
全学総合IB『エコ・フィロソフィ入門』開講(～1月)
- 10月
ニューズレターNo.22 発行
TIEPh主催 国際シンポジウム(環境デザインユニット)
「after our Fukushima」
場所：東洋大学6号館文学部会議室
- 11月
TIEPh主催 特別講演(自然観探求ユニット)
「洞天思想と自然環境の問題」
場所：東洋大学2号館スカイホール
- 12月
TIEPh主催 最終シンポジウム
「かおりの生態学」
場所：東洋大学6号館6203教室
- TIEPh主催 即興ダンス・ワークショップ
(環境デザインユニット)
「環境——人間の組織化」
場所：東洋大学8号館125記念ホール
- TIEPh主催 研究会(環境デザインユニット)
「第七回人間再生研究会」
場所：東洋大学6号館6B15教室
- 3月
「エコ・フィロソフィ」研究第10号、別冊第10号発行
ニューズレターNo.23 発行
活動報告会(評価委員)

ニューズレター23号 平成28年3月発行

編集 東洋大学「エコ・フィロソフィ」学際研究イニシアティブ(TIEPh)

住所：東京都文京区白山5丁目28-20 6号館4F 60458室 Tel&Fax：03-3945-7534

E-mail：ml.tieph-office@toyo.jp Website：http://www.toyo.ac.jp/site/tieph/